

青年期自我の時代的変遷に関する臨床心理学的考察

ー自己顕示・アイデンティティから多面的自己、自己愛的没入へー

長尾 博

The generational changes of adolescent ego in Japan : self-assertion, ego identity, multiple selves, narcissism

Hiroshi Nagao

Abstracts

The purpose of this article was to discuss the generational changes of adolescent ego from prewar time to the present time on the basis of clinical cases in Japan. Consistently, though anthropophobia was developed as Japanese adolescent traits, in the beginning of 20th century thoughtful, sincere, and rigid adolescents were characterized such as Morita neurosis. In the mid-20th century, the various selves were found their expression; identity diffusion, borderline, eating disorders, and apathy. In late-20th century, multiple selves were revealed such as dissociative identity disorder. In 21st century, the narcissistic traits were stood point such as non-attendance, hikikomori, and atypical depression. Finally the author proposed the future issues that clinical psychologists should work on according to Japanese changes concerning various psychotherapy.

Keywords: adolescence, generational changes of ego, narcissism

1. はじめに

「新型コロナウイルス」が、世界中に感染し、社会に衝撃を与えている現状をみると、未来の青年の展望が懸念される昨今である。

哲学者の Spranger (1924) は、「青年は、その時間的展望を過去と未来に急速に拡張させる」と述べていることから、過去から現在までの青年の自我の変遷を紐解いていけば未来の青年のあり方が予測できるのではないかと思われる。

青年心理学のアプローチ法は、心の問題をもつ青年に対しての臨床面接法と多くの健常青年を対象に調査を行う調査法とがある。この2つのアプローチの結果は、異なることが多い。例えば、親からの独立と依存の葛藤や「アイデンティティ」(identity)の確立の葛藤を「青年期の危機⁽¹⁾」というが、Erikson (1950)による臨床面接法では、「青年期の危機」は、どのような青年でも経験するという「青年期危機」説があげられ、Douvan&Adelson (1966)や Offer (1969)などによる多くの健常高校生を対象にした調査研究の結果から「青年期の危機」を経験する青年は少ないという「青年期平穩」説があげられている。本稿では、臨床面接法を重視し、「病的な心を人間精神の可能性の極端な表現として理解し、病的な心こそ人間精神の基本構造が現れているととらえ、病的な心を基準にして健常な心を見ていく」見解である精神病理学的立場⁽²⁾(深尾, 2017)から、戦前から今世紀までの青年の自我の変遷を考察していくことにした。

一般に青年の心の問題は、社会的な動向が大きく影響し(Baltesら,1980)、わが国の青年の心の問題は、アメリカでの青年の心の問題が10年から20年程度遅れて現れやすい。例えば、青年期のアイデンティティの確立のテーマは、アメリカでは1960年代に注目され、わが国では1970年代に注

目されている。また、リストカット (wrist cutting) は、アメリカでは 1970 年代に注目され、わが国では 1990 年代から注目され、発達障害 (developmental disorders) は、アメリカでは 1970 年代に注目され、わが国では今世紀に入ってから注目されている。

このような点をふまえて、本稿では、さまざまな心の問題を中心に青年期自我の変遷を考察するとともに「心理療法⁽³⁾」(psychotherapy)の変遷と今後の心理臨床家(臨床心理士・公認心理師⁽⁴⁾)の課題もあげた。

2. 青年期自我の時代的変遷

1980 年(昭和 55 年)代後半からソビエト連邦で進められた政治改革運動である「ペレストロイカ」(perestroika)は、それまでの米ソ冷戦がおさまり、青年がそれまで重視してきた社会の価値観に即したアイデンティティの確立や確信していたイデオロギーを弱めるという結果を生んだと思われる。また、わが国で 1991 年(平成 3 年)から 1993 年(平成 5 年)に生じたバブル経済の崩壊も青年にとっては目標に向かって頑張れば達成できるというやる気を低下させる結果をまねいたと思われる。筆者は、戦前からの青年の自我と今世紀に入ってからからの青年の自我の大きな相違は、このペレストロイカとバブル崩壊時を分岐点にして「自己顕示 (self-assertion)・自我同一性 (ego identity) の確立」を重視してきた点と「自己愛」(narcissism)を重視している点とに分けられるととらえた。

図 1 は、青年期自我の時代的変遷をまとめたものである。以下に図 1 をもとに戦前から今世紀までの時を追って青年のさまざまな心の問題について考察する。

(1) 自己顕示と自我同一性の確立の時代

図 1 の 1 期の時期は、比較的社会的安定し、価値観も定まった時期であり、青年は、定まった社会のなかで自己顕示 (自己呈示⁽⁵⁾) し、アイデンティティを確立することに価値をみつけていた。青年が、関わる対象は「世間⁽⁶⁾」であり、親が主であった。また、社会に「順応⁽⁷⁾」(adaptation)し、アイデンティティという一面的な社会的自己から立身出世をめざしていた。しかし、順応できない場合や一面的な自己が確立されない場合には、とくに「抑圧」(depress)や「転換」(conversion)という防衛機制が用いられる時代であった。また、1960 年(昭和 35 年代)から 1970 年(昭和 45 年)にかけて生じた大学紛争において、青年は、「知性化」(intellectualization)という防衛機制や暴力によって自己顕示をした。

尚、「対人恐怖症」(anthrophobia)は、わが国特有の心の問題であり(木村, 1982、内沼, 1997)、アメリカ精神医学会の DSM や WHO の ICD-10 にはこの診断名はなく、Benedict (1946) が、日本文化として「恥」の文化をあげたように「世間の目」、「人の目」を気にする国民性を背景にもつ青年期症状である。しかし、この対人恐怖症も時代とともに内容は変化し、戦前からの視線恐怖・赤面恐怖から 1970 年(昭和 45 年)代からの自己臭(体臭)恐怖、そして今世紀に入ってから醜貌(醜形)恐怖へと変化している。

1 期の主な心の問題は、転換ヒステリー (conversion hysteria)、森田神経症 (Morita neurosis)、同一性拡散 (identity diffusion)、境界例 (borderline)、摂食障害 (eating disorders)、アパシー (apathy) である。以下に各問題の特徴をあげる。

① 転換ヒステリー

ヒステリーの概念は、古代エジプトまでさかのぼることができる。その語源が子宮が動き回るという特有なことばであるだけに女性の欲望との関りがしばしば取り上げられてきた。ヒステリーの症状は、頭痛、吐き気、めまい、失声、過呼吸、味覚障害などの身体症状が主であり、周囲に人がいるときに生じやすい。最初に治療者としてヒステリーを取り上げたのは Charcot (1888) であり、彼は、痙攣症状を催眠療法によって除去させている。その後、Freud (1895) が Breuer とともにヒ

ステリー症状に取り組み、ルーシー症例⁽⁸⁾から無意識世界にある性欲の「抑圧」から身体症状に「転換」して症状が現れていることを明らかにした。

この時代は、女性が性欲を表現することは禁忌なことであったためにヒステリー症状が生じたと思われる。また、ヨーロッパの19世紀後半は、父親と母親の役割や男性性と女性性の内容が確立されていたこともあって、Freud (1905) は、幼児期の男児に生じる父親への母親の愛の嫉妬として「エディプスコンプレックス」(Oedipus complex⁽⁹⁾)を提唱している。

しかし、ヒステリーという診断名は、1952年から用いないことになる。その主な理由は、この診断名は女性差別や女性蔑視をふくむことばによることがあげられる。現在では、ヒステリーは、「解離性障害」(dissociative disorder)や「身体表現性障害」(somatoform disorder)に分類されている。わが国では、明治時代に呉秀三が、ヒステリーを「臆病病」と名付けて紹介しており、また、1959年(昭和34年)に池見酉次郎⁽¹⁰⁾が日本精神身体医学会を設立し、ストレス反応による不定愁訴や心の問題をもつ難治な身体症状を「心身症」(psychosomatic disease)と名付けている。小此木(1996)によれば現在では、Freudの時代の転換ヒステリー患者は少なく、田舎の集落などにしかヒステリー一症状は見られないという。

Schneider (1923) は、ヒステリー性格⁽¹¹⁾ (hysterical character) の特徴として「自己顕示性」をあげている。この「自己顕示性」によって社会や集団の中で自己の意見や存在が受け入れられるという長所もあるが、「自己顕示性」が「支配性⁽¹²⁾」(dominance)に変化すると社会的な問題が生じることもある。図1のI期では、安定した社会であったために個人の「自己顕示性」は、「世間」では受け入れやすかったもののII期の「多面的自己の時代」になると多様な価値観や不安定な社会であることから、「世間」では、個人の「自己顕示性」を容易には受け入れられなくなっていく。

②森田神経症

わが国の大正時代において、有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤などの小説家は、「白樺派」とよばれ、彼らの小説は、当時の理想主義に燃える青年の特徴を反映していた。当時の青年の多くは、「・・・であるべきである」という理想や規範に厳しく、そのことに「こだわる」という特徴があった。

森田神経症とは、精神科医の森田正馬(1928;昭和3年)によって創案された心理療法である。彼自身、青年期において心気症⁽¹³⁾に悩み、完全欲が強く、劣等感が強かった。この状態を「森田神経症」と名付け、後にこの神経症は「ヒポコンドリー性基調」をもち、自ら身体の状態を気にしてそれに「とらわれる」ためにますます感覚と注意の交互作用(精神交互作用)が激しくなり、病的状態へと発展すると説いた。森田療法は、「かくあるべし」という「とらわれ」から脱し、人生、心のあり方、死の恐怖を「あるがまま」に受け入れること、気分本位の考えを打ち切り、目的本位の行動をして「とらわれ」の悪循環を断つという治療理論である。具体的には、1週間程度、「臥辱」(がじょく)といって何もせずただ症状に直面し、その後、次第に日記をつけたり、昼間に少し外出したりし、徐々に軽作業から重作業をしていき、最後は現実生活をして症状を除去していく療法である。精神科医の下田光造は、「精神分析療法」(psychoanalysis)とは異なり、東洋的思想を鑑みた療法として奨励したが「神経質」は、先天的ではなく後天的であると反論している。当時の青年は、対人恐怖症や強迫神経症(obsessive-compulsive neurosis)が多かったことからこの療法は注目された。

③同一性拡散と境界例

アイデンティティという語は、日本人にはわかりにくい語であり、無理に「同一性」という語に訳されている。主体性、存在証明、自己証明などの意味があり、アメリカのErikson (1950) が、青年期の自我の発達課題としてアイデンティティの確立をあげ、以後、アメリカでは1960年代から

1990年代まで青年心理学や精神医学で取り上げられてきた。とくに青年心理学では、健常青年を対象に「同一性地位⁽¹⁴⁾」(identity status)の研究が展開された(Marcia, 1966)。

Erikson (1950) は、アイデンティティが確立されていない不適応青年を「同一性拡散」と名付け、とくに決断力がない、時間展望がない、対人的距離が取れない、勤勉さがないなどの特徴をあげた。この「同一性拡散」は、後述する精神医学でいう「境界例」と同様なものとしてとらえられる。

わが国では、アイデンティティの問題は1970年(昭和45年)代から1980年(昭和55年)代まで青年心理学や精神医学で盛んに取り上げられた。この時期の書籍「青年の精神病理」(笠原ら編; 1976, 弘文堂)はよく購読された。また、小此木(1981)は、当時の青年の特徴として、「モラトリアム⁽¹⁵⁾」(moratorium)、つまり、いつまでも青年期を満悦し、アイデンティティを確立しない点を取り上げた。

同時期にわが国の精神医学では、「境界例」が注目されている。「境界例」とは、「統合失調症」(schizophrenia)と「神経症⁽¹⁶⁾」(neurosis)の中間の病態のことをいう(Rickman, 1928)。その後、Kernberg (1967)による精神分析的な見解からパーソナリティ障害であるととらえられ、DSM-III (1980)では、「境界性パーソナリティ障害」(borderline personality disorder)という診断名に変わった。

このように同一性拡散や境界例の歴史を見ていくと1970年(昭和45年)代から1980年(昭和55年)代にかけてのわが国の青年の自我は、それ以前の青年と比較して社会変動にともない次第に動揺してきたと思われる。

④摂食障害

摂食障害は、とくに青年期の女子に多い拒食症と過食症、あるいは拒食症と過食症とが交互に生じ、生理がとまる病である。心理的には自己不全感を自己の身体をコントロールすることによって補償しようとする点がみられる。その歴史は古く、17世紀のヨーロッパの女性に生じていたという。アメリカでは、第2次世界大戦中から始まった「食行動科学⁽¹⁷⁾」において研究されている。わが国では、1960年(昭和35年)代からとくに精神医学において取り上げられた。下坂(1999)によれば、1980年(昭和55年)代までは、摂食障害の病理として「女性になることの身体的成熟拒否」が見られたが、21世紀から「痩身でありたい美的追求」が主であることに変化したという。その治療は、アメリカでは「家族療法⁽¹⁸⁾」(family therapy)が主であるが、わが国の家族療法は、一時的に1980年(昭和55年)代に注目されたもののその専門的な治療者が少ないことやわが国の家族がもつ独自の特性もあって盛んではなくなっていた。しかし、わが国の摂食障害は、年々、増加傾向にある(厚生労働省, 2017)。下坂(1999)の見解を参考にすれば、1960年(昭和35年)代から1980年(昭和55年)代にかけての青年期女性は、当時の社会の定まった女性性に影響を受けて女性性の葛藤による摂食障害が見られたが、その後の青年期女子にとっては女性性の確立というよりも痩身を示して他者や社会から「承認⁽¹⁹⁾」(esteem need)されたい欲求による摂食障害に変化したととらえられる。

⑤アパシー

青年の自我の変容を見ていくと国内において大きな変化が生じた場合には、青年のもつさまざまな「動機づけ⁽²⁰⁾」(motivation)は弱まり、グローバルな国際的変化が生じた場合には、青年のもつ価値観の変化や動揺が生じやすい。

わが国では、1969年(昭和44年)に大学立法が制定された。それまでの大学生は、とくに大学紛争に見られるように社会、大学、大人に対して反抗、反逆していく態度や暴力的行動を示していたが、この大学立法制定以後の大学生は、おとなしくなり、「アパシー」(無気力)を示す者が多くなった。

「アパシー」の語源は、ギリシャ語の pathos（感情・興味）の欠如という語にある。アメリカの Walters（1961）が、大学生の中に無気力な者がいることを指摘して最初に「スチューデントアパシー」と名付けた。その後、わが国では笠原（1973）が、青年期精神医学の分野で「スチューデントアパシー」という語を紹介し、石井完一郎らによって主に大学の学生相談において用いられる語となった。大学立法制定から1980年（昭和55年）代にかけての大学生は、この「スチューデントアパシー」が多くなった。その特徴は、将来の目標がない、過去から達成感や快体験が希薄である、本業（大学生であれば授業に出る、勉強をする）を好まず、好きなこと（アルバイトや学園祭など）に熱心である、勝負に過敏で強迫的な点がある、父親との交流が乏しく、母親との関係が強いことがあげられる。

この「スチューデントアパシー」は、以後、大学生のみならず中学生や高校生の「不登校」(non-attendance) にも見られるようになる。

（2）多面的自己の時代

図1のII期の時期は、ペレストロイカからバブル崩壊の約15年間の短い間をいう。20世紀の後半は、就職氷河期（主に昭和45年から昭和59年までに出生した者）ともいわれ、就職難の時代であった。米ソの冷戦の終了や不況が影響して、それまでの偏差値の高い大学を出れば、将来が保証されるという価値観は薄れ、安定した社会を基盤に一面的な自己であるアイデンティティを確立するという青年期論よりも能力主義や変動していく社会に合わせて柔軟な「多面的自己」に変化させていく価値観へと変化していった。わが国において21世紀の初頭に文部科学省が奨励した「キャリア⁽²¹⁾」(career) 教育は、これまでの成績や学校の偏差値を基準とした進路選択ではなく、変動する社会で人生を通して自分の果たしたいキャリアを教育していくというアメリカのキャリア教育に準じるものになっていった。それは、Hall（2002）のいう「プロティアンキャリア」(protean career) というとらえ方であり、従来のアイデンティティ教育に基づくキャリアとは異なり、社会変動に合わせて転職をする、仕事上で地位よりも心理的成功を重視する、自分は、職場で何をすべきかよりも何をしたいかに重点を置く、所属する企業よりも市場価値に注目するなど社会変動に合わせて変幻自在に自己を適応させるキャリア論である。また、このキャリア論は、「社会事象は人間の頭の中で作りあげたものであり、実際は、人間関係が現実を作っている」という考え方である「社会構成主義⁽²²⁾」(social constructionism) と関連し、この思想は、20世紀後半にオーストラリアの White に始まる「ナラティブセラピー⁽²³⁾」(narrative therapy) という心理療法へと展開していった。Freud にしても Jung にしても自己は、従来から固定したひとつのものであり、それを追求していくという方針の心理療法であったがナラティブセラピーでは、自己は多面的に変化し、それは人間関係や治療関係を通して変化するととらえている。これに関連して、II期の代表的な心の問題として「解離症状」(dissociation) があげられる。解離とは、解決困難な葛藤にさらされた場合、それにまつわる観念や感情を関与しない精神の部分から切り離して、過去の記憶、同一性と直接的感覚の統制に関する統合が全面的あるいは部分的に失われることをいう（西園，2001）。この語は、Janet（1889）が、最初に名付けた。DSM や ICD-10 では、「解離性障害」と診断される。Freud があげた「抑圧」は、自我が自己の無意識内の欲望を抑えるという垂直的なとらえ方であるが、「解離」は、自我を水平的にとらえて、さまざまな自己が分裂して、断片的に示されるというとらえ方である。価値観が多様化し、情報が氾濫した時代になると青年の自我は、限りなく可能性をもったさまざまな自己がいるという幻想や万能的な誇大な自己が生じやすい。

「解離性同一性障害」(dissociative identity disorder) の患者（臨床心理学ではクライアントという）が示す代わる代わる現れる複数のパーソナリティのことを交代人格といい、交代人格が生じている間の自分の言動についての記憶は失われていることが多い。わが国での「解離性同一性障害」は、青年期の女子に多く、ストレスに満ちた親子関係や親からの独立と依存の葛藤があり、過去の心的

外傷 (trauma) が原因であることもある (岡野, 2007)。その治療は、患者が示す強烈な印象や症状に惑わされず、休養を促し、「環境調整⁽²⁴⁾」 (environmental manipulation) が重要であり、必ずしも過去の心的外傷を蘇らせる必要はない。

(3) 自己愛の時代

筆者は、図 1 のⅢ期の始まりを斎藤環の「社会的ひきこもり」(1998、PHP 新書) が刊行された 1998 年 (平成 10 年) からであるととらえている。この頃から青年の非行は減少し (警察庁, 2014; 少年の刑法犯の数が戦後、最少になる)、不登校は増え⁽²⁵⁾ (文部科学省, 2018; 14 万人以上、小学生が 3 万人以上で中学生が 10 万人以上)、また、青年期のひきこもりも増えている (内閣府, 2010; 22 万人以上)。このことから、今世紀に入って消極的で内向的な青年が目立ってきたといえる。その原因は、さまざまあるが少子高齢化や SNS の普及により、直接的な友人との交流から間接的交流に変化し、しかも自己を強く主張して衝突が生じることを好まない青年が増えていることがあげられる。この特徴は、健常青年を対象にした調査でも明らかにされており、岡田 (1995) は、現代青年のもつ他者からの視線や評価に敏感で交友関係において「同調」 (conformity) しやすい傾向をあげている。また、土井 (2008) は、現代青年がもつ交友関係において「空気を読む⁽²⁶⁾」ことの重視をあげている。筆者は、このような交友関係での同調傾向の背景として、「自己愛」の強さと他者や所属集団から「承認」されたい欲求があるととらえている。

「自己愛⁽²⁷⁾」についての定義は、さまざまであるが、筆者は、自分自身についての関心の集中であるととらえている。Gabbard (1989) は、自己愛を思い上がった「誇大性」 (oblivious) と「他者評価の過敏性」 (hypervigilant) の 2 点に分けているが、日本人の場合、とくに評価過敏性の自己愛のほうが多いといわれている (福井, 1998、原田, 2009)。他者や所属集団から良く評価されたいという欲求は、「承認」欲求と通じるところがある。哲学者の Hegel (1805) は、「承認」は、自己と他者や集団との相互確認によって成立すると述べていることから、「承認」を得るには、単に一方的に自己顕示や自己主張することだけでは困難であることがわかる。DSM や ICD-10 の「自己愛性パーソナリティ障害⁽²⁸⁾」 (narcissistic personality disorder) の診断基準の中に「共感性⁽²⁹⁾」 (empathy) の欠如があげられていることから、複雑な現代社会において、一方的な自己顕示や自己主張ではなく他者との「共感」が成立し、「自己愛」が満たされ、初めて「承認」を得られると思われる。現代青年にとって他者と「共感」できることは容易なことであろうか。そこで最近の「自己愛」に関する外国の代表的研究を表 1 にあげた。

筆者は、他者や集団との「共感」不全から「承認」を得ないことに不満をもつ自己愛的な青年が、現代青年の特徴であるととらえる。

昨今の臨床現場では、「自己愛」の傷つきから現実状況を「回避」 (avoidance) したり「逃避⁽³⁰⁾」 (escape) したりする青年、とくに他者との同調に気を取られ「過剰適応⁽³¹⁾」 (overadaptation) に疲弊した「不登校」生徒や学校や職場で「誇大自己」 (grandiose self) が傷ついて「ひきこもり」や「新型うつ病」に陥った青年が増えている。以下にⅢ期に代表される「不登校」、「ひきこもり」、「新型うつ病」を考察する。

①不登校

わが国の不登校の歴史は古く、1957 年 (昭和 32 年) に高木隆郎が Treynor (1929) の school phobia を「学校恐怖症⁽³²⁾」と訳したことに始まるといわれている。1992 年 (平成 4 年) には、文部科学省はどのような生徒でも不登校を示しやすいことをあげ、1995 年 (平成 7 年) から主に臨床心理士によるスクールカウンセラーの学校への派遣事業によってにわかには不登校が目立ちはじめた。しかし、少子化にもかかわらず、年々、不登校は増加の一途である。スクールカウンセラーが増えているにもかかわらず、不登校が増えている原因は、さまざまあるがスクールカウンセラーのリーダーの不

在や臨床心理士は、登校できる特殊な技法をもたないことがあげられる。また、不登校にもさまざまなタイプがあり、筆者は、(1) 分離不安型、(2) 過剰適応型、(3) 評価懸念型、(4) 緘黙型、(5) きょうだいで不登校型、(6) 離婚反応型、(7) 被虐待型、(8) 対抗型および (9) 発達障害の 9 つをあげている（詳しくは、「ケースで学ぶ不登校」金子書房を参考にしていきたい、近日刊行予定）。

②ひきこもり

ひきこもりとは、20 歳後半までに問題化し、6 か月以上、自宅にひきこもって社会参加しない状態が持続していることをいう（斎藤，1998）。しかし、最近では、40 歳から 64 歳までの中高年のひきこもり⁽³³⁾が増えている（内閣府，2019）。青年期のひきこもりの要因には、交友関係、教師との関係、家族・親子関係、アルバイトや職場の対人関係などの「人間関係」の不調と、目標がない、社会全体に不満があるなどの社会自体に不可解さを抱えていることがあげられる。ひきこもりの特徴として、長男に多く、中流階層以上で被虐待歴はないことがあげられる（斎藤，1998）。ひきこもるきっかけが、不登校経験から（斎藤，1998、伊藤ら，2003）と不登校経験はない者（内閣府，2019）とがいる。心理的には、なんらかの自己愛の傷つきが見られることが多い。また、精神医学的にとらえて、統合失調症、うつ病、さまざまなパーソナリティ障害、スチューデントアパシー、発達障害⁽³⁴⁾であることも多い。その治療は、長期のインターネットによる自助グループへの参加、母親面接、訪問面接を行って解決（社会進出）することがある。

③新型うつ病

厚生労働省（2009）の調査では、「うつ病」は全国で 104 万人以上もいて、年々、増加傾向にあるという。青年期の「うつ病」については、15 歳以後に発症する「思春期うつ病」と 20 歳代から 30 歳代に多い「うつ病」とに分けてとらえていく。「思春期うつ病」は、不登校や身体症状として現れやすく、とくに女子に多い（中西，1999）。集団での同調にこだわり、「自尊感情」（self-esteem）が低く⁽³⁵⁾、対人的技能の未熟さや将来の目標が乏しいことから生じやすい。精神科クリニックでの治療において、一般には一年以内で回復しやすい。

一方、20 歳代や 30 歳代の「うつ病」には、従来からの「メランコリー親和」型の「うつ病」があり、このタイプは、几帳面、まじめ、秩序を好み、他者に配慮的な特徴があり、休養と抗うつ剤の服用でよくなることが多いものの、今世紀に増えてきた「ディスチミア親和⁽³⁶⁾」型（dysthymia；気分変調を意味する）の「うつ病」のほうは、自己愛的で秩序を好まず、プライドが高く、他罰的でストレスにもろいという特徴があり、薬物療法は効果が乏しいという（樽味，2005）。この「ディスチミア親和」型の「うつ病」は、薬物療法よりも心理療法のほうが効果があることが多い。このタイプの「うつ病」の発症のきっかけは、自己愛の傷つきが多い。現代の「うつ病」の増加傾向は、このタイプの「うつ病」が増えていることによるといわれている。

3. わが国の心理療法の時代的変遷

2017 年（平成 29 年）に「公認心理師」が国家資格となったこともあり、今後は、クライアントとの 1 対 1 の心理療法よりもむしろ他の職種との「連携」（cooperation）が重視される時代となるであろうが、筆者は、青年期クライアントとの 1 対 1 の心理療法実践も重要であるととらえている。

表 2 は、イメージ（無意識）水準から行動（意識）水準までのわが国における主な心理療法の歴史について概略したものである。表 2 の Jung による「分析心理学的心理療法」は、20 世紀前半からヨーロッパで始まり、わが国では河合隼雄⁽³⁷⁾が 1965 年（昭和 40 年）に「箱庭療法」（sand play）を紹介したことから始まる。わが国ではこの療法を行う臨床心理士は多いものの、箱庭やコラージュ

ユを行って、なぜ自我が変化するのかについての理論が欠如していると思われる。また、Freud に始まる精神分析療法⁽³⁸⁾は、多くの流派に分かれ、わが国では臨床心理士の会員は減少傾向にある。この療法は、メンバーが固定化し、難しい用語を用い、長期の専門訓練を要することに難点がある。また、アメリカの Rogers に始まる「クライエント中心療法」(client centered therapy; カウンセリング⁽³⁹⁾)は、戦後、間もなく紹介されたものの、上下関係にこだわる日本人には馴染めず、その後、相当な時間が過ぎているにもかかわらず、一般市民や臨床家は、本来のカウンセリングの意味はいまだ理解されていない点がある。むしろ「フォーカシング」や「エンカウンターグループ」が注目され、カウンセリングのケース報告が少ないという現状である。また、今世紀からとくに注目され始めたアメリカに始まる「認知行動療法⁽⁴⁰⁾」(cognitive behavioral therapy)は、わが国ではそれまで実験心理学⁽⁴¹⁾や発達心理学を専攻していて、突然に臨床心理学に転換した大学教員が多いことからこの療法の注目度が高い。しかし、筆者の経験から「認知行動療法」は誰でも他分野を専攻した者でも即座にできるものではなく、クライエントとの信頼関係を基本とするカウンセリングができてこそ可能な療法であるにとらえている。

表2を参考にして、治療者のほうではなく、クライエントのパーソナリティや症状・問題をとらえて、イメージ中心か、それとも行動中心かの心理療法の選択が重要であると思われる。どのような心理療法が効果的なのかについては、筆者なりに長年の経験をもとにまとめている(変化の心理療法、2016、ナカニシヤ出版)。この書の中で医学界の模倣による昨今の心理臨床研究で重視されている科学的な「根拠⁽⁴²⁾」(evidence)よりもむしろ「臨床経験」の重要性あげている。また、「互酬交換⁽⁴³⁾」の原理から治療者のもつ「魅力⁽⁴⁴⁾」(クライエントにとって、もう一度、会って話してみたいと思わせる魅力)の重視をあげている。

4. おわりに

以上、青年期の自我の変遷を臨床心理学的に論じてきたが、今後、臨床心理士・公認心理師にとって現代青年の自己愛を脱皮させ、心を成長させていくためには多くの課題が残されていると思われる。そのためには、まず、臨床心理士・公認心理師自身の自己愛の脱皮が先決ではなかろうか(筆者の約半世紀にわたる臨床家としての人生をまとめた「心のメモランダム」ナカニシヤ出版、近日刊行を参考にしていきたい)。

筆者なりに青年の心を今よりも成長させる方向性として、2方向とらえている。1つは、青年の家族の変容と支援である。現在、わが国の家族は、統合家族は少なく、むしろ疑似統合家族や崩壊家族が増えている。このことは、離婚の増加(厚生労働省、2014)や「児童虐待」(child abuse)の増加(厚生労働省、2016)、家庭内殺人の増加(警察庁、2017)の実態からもわかる。したがって、今後の臨床心理士・公認心理師は、青年の家族の「環境調整」を行うケースワーカー⁽⁴⁵⁾的な職務が必要とされるであろう。もう1つは、青年の交友関係を取り扱うカウンセラーとしてのスキルの研鑽であろう。不登校の原因の多くは、交友関係上の問題であることが明らかにされている(文部科学省、2005)。このことをふまえて現在、教育心理学や臨床心理学において、生徒に対しての行動中心のSST(social skill training; 対人関係技能訓練⁽⁴⁶⁾)が強調されているが、実際の学校現場では、まだSSTを行う準備体制や教師のSSTの学習が不備である。このようなことから、臨床心理士・公認心理師は、まずは生徒の感情を「共感」できるカウンセリングが真にできることのほうが重要であるにとらえている。面接を1~2回の短期間で済ませたり、ラポールができないままのカウンセリング中断が多いことが現状としてある。交友関係の悩みを聞く前に青年期クライエントとのラポール形成の基礎を習得し、ことばのもつ心を動かす重みを実感することも大切ではなかろうか。

また、このように家族関係や交友関係の問題解決に向けて支援していくと同時にわが国に立ちほだかる3つの大きな問題も知っておくべきであろう。それは、子ども・青年の学力不足⁽⁴⁷⁾(東京大学が世界学カランキングで42位; タイムズハイヤーエデュケーション、2019)、男女共同参画の問

題（GGP；gender gap 指数が世界で 110 位；世界経済フォーラム，2018）、低い幸福度（世界で 58 位の幸福度；国際連合，2020）の 3 点である。しかし、わが国の青年の幸福度は、比較的が高いという結果が示されている（内閣府，2011）。この矛盾点について、現代青年は、現状を素直に受け入れて幸福感を感じているのか、それとも現状は受け入れてはいないが妥協しているのかの問題が残る。現状に妥協して自己愛を保つのであれば心の成長はないであろう。青年の自己愛を脱皮させ、心を成長させていくには何よりも「魅力ある他者との出会い」ではなかろうか。

<注>

- (1) 長尾（1989）は、「青年期の自我発達上の危機状態」を定義し、その尺度を作成して 1990 年代に多くの健常青年にこの尺度を実施した。その結果、約 3 割の青年が自我発達上の危機を経験したり、危機に直面していることが明らかにされた。
- (2) 精神医学では、精神病理学（psychopathology）というが、心理学では、異常心理学（abnormal psychology）ともいう。ドイツの Jaspers（1913）に始まる。
- (3) 心の治療法のことをいう。井村（1952）は、心理療法の基礎的要因を「支持」、「表現」、「訓練」、「洞察」の 4 点をあげている。なお、心理療法の効果は、10 人のクライアントに対してわずか 3 人程度の効果しか生じないことが実証されている（Eysenck，1952）。
- (4) 2017 年（平成 29 年）に国家資格となった。国家資格に至るまでに約 70 年もかかっている。主にイギリスをモデルにして創案された。以前のような人の心に携わることによって資格が本当に必要なのかという倫理観の論議はなく、自動車運転免許取得と同様にとらえ方をする者もいる。
- (5) 自己呈示（self-presentation）とは、他者からの承認や物的報酬などの肯定的な反応を得るために自己の情報を他者に伝達することをいう（Schlenker & Leary，1982）。
- (6) 「世間」という語は、日本人を見ていく視点として社会学や文化人類学でとらえられてきた。井上忠司（2007）は、赤の他人と身内との中間の準拠集団と定義し、互酬、贈与、身分などのルールがあるという特性に注目している。
- (7) 「適応」（adjustment）とは、環境に適合し、主体的に環境に働きかけていく営みをいい、「順応」（adaptation）とは、個人の機能や状態を受身的に外的条件に応じて変化させることをいう。日本人の場合、「適応」と「順応」を混同しやすい。
- (8) Freud のヒステリーの 4 症例のうちの 1 つであり、30 歳の未婚のルーシーが感じる不快な臭いを主訴とする治療過程でルーシーが工場主に恋心を抱き、この工場主が、葉巻を吸う来客に叱責している場面を見てから不快な臭いを感じるようになったことに気づいて治っていったという症例である。Freud は、このルーシー症例から自我による無意識（性欲）の抑圧を解明していった。
- (9) 3 歳から 5 歳頃の男児がもつ父親のように強い男になりたいという憧れと父親から母親の愛を奪い取られたくないことからの敵対心が生じる複雑な心理をいう。ギリシャ神話の父親殺しをした「エディプス王」の物語に由来する。現代の青年男子の心には、「エディプスコンプレックス」の潜在は少ない（長尾，2005）。
- (10) わが国で最初に大学病院で「心療内科」を開設した。「心身症」臨床のパイオニアである。
- (11) 未熟、勝気、わがまま、自己顕示的な性格をヒステリー性格といい、強迫性格の几帳面、まじめ、しつこいという特徴とは「性」（しょう）が合わない点が多い。現在、DSM や ICD-10 では、ヒステリー性格を「演技性パーソナリティ障害」という。
- (12) 「君主論」を書いた Machiavelli を参考にして社会心理学では、支配性の強い性格をマキャベリアンといい、Christie & Geis（1970）は、マキャベリアニズム尺度を作成している。

- (13) 「心気症」(hypochondriasis)とは、身体的な病ではないにもかかわらず身体的不調を感じて病ではないかと不安になる神経症をいう。「生」への欲求が強く、「死」の不安が強くあることに原因があるといわれている。
- (14) Marcia (1966) が、構造的面接によってアイデンティティの達成度を「同一性地位」という視点でとらえ、達成、モラトリアム、同一性混乱、早期完了の4つの地位に分けた。1970年代の日米の大学生は、同一性達成が多かったが、1980年代になるとモラトリアムの大学生が増えた。
- (15) 「モラトリアム」とは、本来、経済学の用語で「支払い猶予期間」を意味する。Erikson (1950) は、青年が早く大人にならなくても社会が時間的に猶予しているととらえ、青年期の遷延現象を「モラトリアム」といった。現在では、大人になる(心が成熟する)暦年齢は、35歳頃であるといわれている。
- (16) ドイツ語の「ノイローゼ」と一般にはいう。Cullen (1777) が最初に名付けた。精神病は、内因性(脳内の異変による)であり、ノイローゼは、心因性、つまり心の葛藤やストレスから生じるものであることからカウンセリングや心理療法の効果がある。
- (17) アメリカでは、1960年代になって盛んになった。味覚、食と感情、食習慣、食べる「場」や「雰囲気」、「ダイエット」などの研究をしている。わが国の心理学でのこの分野は遅れている。
- (18) クライアントだけではなく、その家族もふくめて行う心理療法。1950年代に欧米で広まった。流派も多く、その国の文化や伝統を理解しないまま、また、1対1の心理療法の基礎ができていないまま、家族療法を行うと行き詰まることが多い。
- (19) Maslow (1962) の「欲求階層説」によれば、ヒトの欲求は、生理、安全、所属・愛、承認、自己実現の5段階の階層が想定されているが、物が豊かで平和であるわが国では、マスコミや群集心理によって、下位の3つの欲求から飛躍して青年の「承認」欲求は強い。しかし、今後、明確な格差社会になってくると「承認」欲求は、弱まってくるであろう。
- (20) 「動機づけ」には、「外発的動機づけ」(他者の励ましや叱責によるもの)と「内発的動機づけ」(自ら自発的なやる気)とがあり、わが国の「ゆとりの教育」(1980年から2010年頃まで)の失敗は、「性善説」の立場から、子どもは、大人が何もしなくても「内発的動機づけ」が生じるという見解の誤りに原因があると思われる。
- (21) careerの語源は、carriage(運ぶ乗り物)とcarrier(運ぶこと)にある。つまり、本来、ある目標まで運んでたどり着くことを意味しており、「生き方」や「生きる方向」を意味する。実際には、仕事の経歴や経験をいい、職業能力を蓄積する過程を指す。わが国では、「資格」取得後、プロとしての研鑽を重視しない職業も多く、臨床心理士・公認心理師が、資格取得後、スーパーヴィジョンを受ける者が少ないのは、わが国にその指導者が少ないことによる。
- (22) 社会学では、フランスのDurkheimに始まり、1960年代にはアメリカのBergerやLookmanが構成主義を唱えた。心理学では、最初にキャリア理論においてSavickasが構成主義を唱え、フランスのDerridaは、本質論(脱構築論)を唱えて反論している。
- (23) Rogersの「非指示的カウンセリング」の人間観や療法論に類似している。クライアントは、出来事を「語り」、そのことへの感情を表現し、治療者は、クライアントと対等な関係で出来事を聞き、クライアントに新しい創造的な出来事が生じるような支援をしていく療法である。
- (24) クライアントの周囲、例えば、親、友人、職場の者などに働きかけて調整することをいう。アメリカでは、主にケースワーカーの職務であり、クライアントの心を扱う職務は、精神科医か臨床心理士であるという分業が果たされているが、わが国ではこの識別はまだ明確ではない。
- (25) 臨床心理士は、スクールカウンセラーとして長く「不登校」にかかわっているが、「不登校」の定義について明確に打ち出した者は少ない。文部科学省(1998)は、何らかの心理的な原因で年間30日以上欠席した者と定義している。

- (26) 山本七平 (1977) が、最初にあげた語。わが国にある平安時代からの人間関係様式。1 対 1 や集団の人間関係において情緒的關係、勢力關係、利害關係などをことば外の表現、とくに状況的雰囲気を理解して自己調整することをいう。
- (27) Ellis (1898) が、自己の身体に性的興奮を感じる「自体愛」を水鏡に映る自分の姿に恋した青年ナルシシスのギリシア神話に喩えてあげた語。Freud (1914) は、リビドー (心のエネルギー) が、幼児期に自分に向けられる一次的ナルチズムと、成長した後、何らかの理由から再び自分にリビドーが向けられる二次的ナルチズムに分けている。
- (28) 自分の才能について誇大な評価をする、自分を特別な人間ととらえる、賞賛されたい欲求が強い、他者を利用する、共感性が乏しいなどの特徴がある。
- (29) 「同情」(sympathy) は、自他未分化な状態で相手の感情をくむことをいい、「共感」は、自己と他者の違いを理解したうえで感情をくむことをいう。日本語の「思いやり」は、「共感」とは異なる (筆者の「共感と日本語の思いやりの意味の相違点とその測定」活水論文集、第 62 集、1-15、2019 年を参考にしていきたい)。
- (30) 「逃避」は、不快なものから逃げることをいい、「回避」は、避けることをいう。現代青年が現実から遠のく傾向について、統合失調症や自閉症の特徴である「自閉」(autism)、不登校生徒の学校からの「逃避」、ひきこもりの「内閉」(withdrawal) などさまざまなことばがあることから、筆者は、「現実からの接触回避」傾向という語で現代青年をとらえている。
- (31) 必要以上に環境へ過度に「順応」することをいう。「よい子」に多い。アルコール依存症の親や虐待する親に育った「アダルトチュルドレン」やまじめで几帳面、責任感が強い子どもに多い。
- (32) アメリカの Johnson ら (1941) が、母親からの「分離不安」(separation anxiety) によって不登校を示す生徒を「学校恐怖」型不登校ととらえた。わが国では、教師も臨床心理士もとかく不登校を「怠学」(truancy、ずる休み) ととらえやすい。
- (33) 中高年のひきこもりは、61 万人以上もいて (内閣府、2019)、過去の川崎市の児童殺傷事件や元次官が、ひきこもりの息子を殺害した事件などからわかるように社会的に深刻な問題である。
- (34) 「自閉症」、「アスペルガー症候群」、「学習障害」、「注意欠陥多動性障害」(ADHD) などがある。
- (35) 自分自身を価値ある人間であると感じる感覚をいう。心理学では、重視されている概念である。日本人の自尊感情は低いという結果は、さまざまな調査から明らかにされている (古荘、2009)。自尊感情が低い原因は、さまざまあり、自己肯定感を重視しない教育、謙讓の美の文化、自己評価よりも他者評価を重視する国民性などがある。
- (36) 古代ギリシャ語の「悪しき心の状態」を意味する。
- (37) わが国における「臨床心理学」のパイオニア。文学、文化人類学、教育学、社会学など広い分野にわたり、貢献している。
- (38) 無意識世界の内容を意識化させることによって症状発症の原因を明らかにしていく心理療法。オーストリアの Freud に始まる。わが国では、古澤平作によって導入された。Jung は、Freud の弟子であり、双方は、1913 年に決裂している。
- (39) 聖書の中の counsel of perfection 「完全への勧め」という語に由来する。日本人のほとんどが、マスコミの影響を受けて「アドバイス」(助言・指示) を行うことと理解しているが、「カウンセリング」とは、悩んでいる過程の感情を「聴く」ことをいい、その解決はカウンセラーではなく、クライアント自身である。
- (40) 21 世紀になってアメリカの医学界では、「うつ病」の治療において薬物療法とともに「認知行動療法」を行うと効果があることを強調し始めた。その影響を受けてわが国でも従来の「行動療法」から「認知行動療法」のほうに注目し始めた。「行動」の変容よりもヒトの「認知」の変

容は、容易なものではなく、心理療法の基礎を身に着け、臨床経験が豊富でなければ「認知」の変容は生じないものである。

- (41) 主に動物（ネズミ、猫）などを対象に実験をし、仮説を統計解析を用いて検証していく心理学をいう。「臨床心理学」は、「ケース研究」が主であることから、「科学性」がないといわれ、「臨床心理士」の資格ができる前までは、「臨床心理学は、心理学ではない」といわれてきた。現在では、一般市民は、「臨床心理学」が「心理学」の中心であるにとらえている。安易に専攻を転換する者が多いのもわが国の心理学者の特徴である。
- (42) アメリカの医学界では、Guyatt（1991）がEBM（evidence based medicine）を提唱し、「根拠」のある治療法が強調され始めた。この影響を受けて「臨床心理学」においても「根拠」のある治療法や論文審査の基準に「根拠」が取り入れられた。そのため、それまで強調されてきた「心理療法は、経験が7分で知識が3分」というような「臨床経験」の重要性は軽視されつつある。
- (43) 原始時代からある「物々交換」の原理であり、give and takeの関係をいう。「互惠性」(reciprocity)は、対人関係の基本でもある。
- (44) 心理学では、人は、なぜ「魅力」を感じるのかの原理や原因について明らかにされていない。熟知、類似性、返報性、身体的特徴（容貌やスタイル、声など）などがあげられているがまだ、明確ではない。
- (45) 福祉分野でのコーディネーター的役割をする。身体や精神、生活面で困難を感じている人に対して、とくに衣、食、住、経済面の支援をして相談にのる仕事が多い。臨床心理士よりも具体的な解決を行い、支持、指示、説得、助言が中心となる。
- (46) アメリカの Lieberman が、精神科病院で精神病患者に対して行った社会復帰のための行動スキルの訓練法をいう。わが国へは1988年（昭和63年）に紹介されている。現在では、学校現場の生徒の人間関係の訓練や発達障害の治療訓練に適用されている。
- (47) 学力とは何かという根本問題がある。ゆとりの教育が失敗だったのかどうかは、長い時間が過ぎないとわからない点もある。詰め込み教育から、考える教育、経験重視の教育へと変換したゆとりの教育は、少なくとも子どもたちの基礎学力を低下させたことは確かである。

文 献

- Baltes,P.B. et al.(1980) Life-span development psychology. Annual Review of Psychology, 31, 65-110.
- Benedict,R. (1946) The chrysanthemum and the sword. Boston; Houghton Mifflin. 角田安正（訳）（2008）
菊と刀 光文社文庫
- Charcot, J.M. (1888) Lecons du mardi à la Salpetriere. Paris; Alcan.
- 土井隆義(2008) 友だち地獄 ちくま新書
- Douvan,E. & Adelson, J. (1966) The adolescent experience. New York; John Wiley.
- Erikson, E. H.(1950) Childhood and society. New York; W W Norton. 仁科弥生（訳）（1977・1980）
幼児期と社会 I・II みすず書房
- Freud, S. & Breuer, J. (1895) Studien über Hysterie. Wien; Fischer Verlag. 懸田克躬（訳）（1974）
フロイト著作集7 人文書院
- Freud, S. (1905) Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. Wien; Fischer Verlag. 懸田克躬（訳）（1953）
フロイト選集5 日本教文社
- 深尾憲二郎（2017） 精神病理学の基本問題 日本評論社

- 福井敏(1998) 誇大的な自己 こころの科学、82、75-86.
- Gabbard, G. O. (1989) Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Hall, D. T. (2002) *Career in and out of organizations*. New York; Sage.
- 原田新 (2009) 自己愛の過敏性に関する一考察 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 3, 19-28.
- Hegel, G. W. F. (1805) *Jenaer Systementwürfe III*. Hegel Gesammelte Werke. Horstmann, R.P. (訳) (1976) Hamburg; Felix Meiner Verlag.
- 伊藤順一郎ら (2003) 社会的ひきこもりに関する相談・援助状況実態調査 こころの健康科学研究事業総合報告書 45-69.
- Janet, P. (1889) *L'automatisme psychologique*. Paris; Alcan.
- 笠原嘉 (1973) 現代の神経症 臨床精神医学, 2, 153-167.
- 警察庁 (2014) 平成 26 年度警察白書
- 警察庁 (2017) 平成 29 年度警察白書
- Kernberg, O. (1967) Borderline personality organization. *Journal of American Psychoanalysis Association*, 15, 641-685.
- 木村駿 (1982) 日本人の対人恐怖 勁草書房
- 厚生労働省 (2009) 平成 21 年度 うつ病の患者数調査報告
- 厚生労働省 (2014) 平成 26 年度 人口動態統計 (離婚率調査)
- 厚生労働省 (2016) 平成 28 年度 児童虐待相談対応件数報告
- 厚生労働省 (2017) 平成 29 年度 みんなのメンタルヘルス (摂食障害の統計)
- 国際連合 (2020) 世界幸福度ランキング
- Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551-558.
- 森田正馬 (1928) 神経質の本態及療法 吐鳳堂
- 文部科学省 (1992) 登校拒否問題についての報告
- 文部科学省 (2004) キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書
- 文部科学省 (2005) 不登校となったきっかけと不登校状態が継続している理由
- 文部科学省 (2018) 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 内閣府 (2010) 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査)
- 内閣府 (2011) 国民生活に関する調査 (若者の幸福度に関する実態調査)
- 内閣府 (2019) 生活状況に関する調査 (40 歳以上のひきこもりに関する実態調査)
- 長尾博 (2016) 変化の心理療法 ナカニシヤ出版
- 長尾博 (2021) 心のメモランダム ナカニシヤ出版刊行予定
- 長尾博 (2021) ケースで学ぶ不登校 金子書房刊行予定
- 中西俊夫 (1999) 思春期・青年期のうつ病 最新精神医学, 4, 31-36.

- 西園昌久 (2001) 解離ヒステリー 加藤正明ら (編) 精神医学事典 弘文堂
- Offer, D.(1969) The psychological world of the teenager. New York; Basic Books.
- 岡田努 (1995) 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43,354-363.
- 岡野憲一郎 (2007) 現代日本の解離性同一性障害 田中究 (編) こころの科学 139 日本評論社
- 小此木啓吾 (1981) モラトリアム人間の時代 中公文庫
- 小此木啓吾 (1996) ヒステリーの歴史 imago, 7 青土社
- Rickman, J. (1928) The development of the psychoanalytic theory of the psychoses. London; Bailliere, Tindall & Cox for the Institute of Psychoanalysis.
- 斎藤環 (1998) 社会的ひきこもり PHP 新書
- 世界経済フォーラム (2018) Global gender gap report.
- Schneider, K. (1923) Die psychopathischen Persönlichkeiten. Wien; Deuticke. 懸田克躬ら (訳) (1954) 精神病質人格 みすず書房
- 下坂幸三 (1999) 摂食と過食の心理 岩波書店
- Spranger, E. (1924) Psychologie des Jungendalters. Wien; Quelle & Meyer.
- 樽味伸 (2005) 現代社会が生むディスチミア親和型 臨床精神医学, 34, 687-694.
- The Times Higher (2019) 世界大学ランキング
- Treynor, J. V. (1929) School sickness. Journal of Iowa State Medical Society, 19, 451-453.
- 内沼幸雄 (1997) 対人恐怖の心理 講談社学術文庫
- Walters, P.A.Jr.(1961) Student apathy. Blaine, B.Jr. et al. (Eds) Emotional problem of the student. New York; Appleton Century. 石井完一郎ら (訳) (1975) 学生の情緒問題 文光堂
- White, M. (2018) Narrative therapy. Hamilton of New Zealand; Waikato University Press.

<注>の文献

- Christie, R. & Geis, F.L.(1970) Studies in Machiavellianism. New York ; Academic Press.
- Cullen, W. (1777) First lines of the practice of psychic. London; Waverley.
- Ellis, H.N. (1898) Studies in the psychology of sex. New York; Constable & Company.
- Erikson, E. H. (1950) Childhood and society. New York; W W Norton. 仁科弥生 (訳) (1977・1980) 幼児期と社会 I・II みすず書房
- Eysenck, H. J. (1952) The scientific study of personality. London; Routledge & Kegan Paul.
- Freud, S. (1914) Zur Einführung des Narzißmus. Wien; Fischer Verlag. 懸田克躬 (訳) (1953) フロイド選集 5 日本教文社
- 古荘純一 (2009) 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 光文社新書
- Guyatt, G. H. (1991) Evidence-based medicine. ACP Journal Club; A-16.
- 井村恒郎 (1952) 心理療法 世界社
- 井上忠司 (2007) 世間体の構造 講談社学術文庫
- Jaspers, K. (1913) Allgemeine Psychopathologie. Berlin; Springer. 内村祐介ら (訳) (1953・1955・1956)

精神病理学総論 上・中・下 岩波書店

Johnson, A. M. et al. (1941) School phobia. American Journal of Orthopsychiatry, 11, 702-708.

Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality & Social Psychology, 3, 551-558.

Maslow, A. H. (1962) Toward a psychology of being. New York; Van Nostrand. 上田吉一（訳）（1964） 完全なる人間 誠信書房

長尾博（1989）青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, 37, 71-77.

長尾博（2005）青年期の自我発達上の危機状態に関する研究 ナカニシヤ出版

内閣府（2019）生活状況に関する調査（40歳以上のひきこもりに関する実態調査）

Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982) Social anxiety and self-presentation. Psychological Bulletin, 92, 642-669.

山本七平（1977）空気の研究 文春文庫

| | | | | | | |
|--------------|----------------------|--------------|-------------------------------|---------------|-----------------------------|--------------------------|
| 時 | 1890年（明治23年）～ | 1920年（大正9年）～ | 1960年（昭和35年）～ 1969年（昭和44年） | 1985年（昭和60年） | 1991年（平成3年）～ 1993年（平成5年） | 1998年（平成10年）～ |
| 出来事 | ヨーロッパで「ヒステリー」の研究 | 白樺派の小説家の登場 | 大学紛争・大学立法 | ペレストロイカ | バブル崩壊・就職氷河期 | |
| 自己の特性 | Ⅰ期 自己顕示・自我同一性 | | | Ⅱ期 多面的自己 | | Ⅲ期 自己愛 |
| 主な心の問題 | 転換ヒステリー | 森田神経症 | 同一性障害・境界例・摂食障害・アパシー | 解離性パーソナリティ障害 | | ・不登校 ・ひきこもり ・新型うつ病 |
| | 対人恐怖症 | | | | | |
| 関わる対象と関係のあり方 | 世間・親（上下関係） | | | 友人・SNS（対等な関係） | | 自己愛的没入 |
| 対社会との関わり | アイデンティティの確立 一面的自己 | | | 多面的自己 | | 承認欲求か 回避か |
| 防衛機制 | 抑圧 転換 | 知性化 暴力 | | 解離 | | 同調か 逃避・回避か |

図 1 青年期自我の時代的変遷

表 1 最近の自己愛に関する研究論文

| 著者 | タイトル | 概要 | 雑誌名 |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| Ojanen, T.ら (2012) | Physical and relational aggression in early adolescence | フィンランドの中学生 384 名に質問紙尺度を実施した。その結果、支配性の強い自己愛タイプの男子は、身体的な攻撃性があり、女子は関係性攻撃が強かった。 | Aggressive Behavior, 38, 99-107. |
| Fossati, A.ら (2010) | Relations of proactive and reactive dimensions of aggression to overt and covert narcissism in nonclinical adolescents | イタリアの 674 名の高校生に質問紙尺度を実施した。その結果、Wink (1991) のいう顕在的自己愛タイプは積極的攻撃傾向があり、潜在的自己愛タイプは仕返しのための攻撃傾向を示した。 | Aggressive Behavior, 36, 21-27. |
| Eberly-Lewis, M. B.ら (2018) | Parenting and adolescent grandiose narcissism | アメリカの中学・高校生 460 名に質問紙を実施した。その結果、父親の子どもへの肯定的感情や自立心の促しは、子どもの誇大自己を形成しやすいことが示された。 | The Journal of Genetic Psychology, 179, 207-218. |
| Bleiberg, E. (1994) | Normal and pathological narcissism in adolescence | 自己愛の傷つきやすさについて、健常青年と病理性がある青年との違いは、万能感、投影、欠点の否認、承認欲求の強さが特徴で生育史において、残忍性、自己顕示、マゾヒズムがあることが文献から明らかになった。 | American Journal of Psychotherapy, 48, 30-51. |
| Kufner, A. C. P.ら (2013) | The two pathways to being an (un) popular narcissist | ドイツであまり知らない者どうしの大学生 163 名に 4~6 名のグループを作らせ、交流をもたせた結果、攻撃的な自己愛タイプは、嫌われ、支配性が強い自己愛タイプは、好まれることが示された。 | Journal of Personality, 81, 184-195. |
| Maltby, J.ら (2008) | Implicit theories of a desire for fame | イギリスで 12 歳から 72 歳までの 1534 名に質問紙で名声欲求を測定し、因子分析を行った。その結果、9 因子が抽出され、そのほとんどが「自惚れ」や「野心」など自己愛的な内容であった。 | British Journal of Social Psychology, 58, 591-608. |
| Marchlewska, K.ら (2019) | My way or the highway | アメリカで 407 名にポーランドで 405 名に質問紙を実施した。その結果、自尊感情が高い者は、民主主義傾向が強かったが、自己愛の強い者は、その傾向は認められなかった。 | British Journal of Social Psychology, 58, 591-608. |
| Leckelt, M.ら (2015) | Behavioral processes underlying the decline of narcissists popularity over time | 18 歳から 39 歳までの 311 名に 3 週間のグループ交流を行わせ、自己愛の強い者が、次第に人気なくなる過程を分析した。その結果、似た者と競い合っ人気なくなる者と攻撃的で傲慢なタイプがいた。 | Journal of Personality & Social Psychology, 109, 856-871. |

表 2 わが国の主な心理療法の歴史概略

| 関わる心の水準 | 主な心理療法 | 歴史の概略 |
|---------|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 行動 | 認知行動療法 | Ellis (1957) が論理療法を創案 Beck (1963) が認知療法を創案 日本認知行動療法学会が 2016 年 (平成 28 年) にできる |
| 言葉 | クライアント中心療法 (カウンセリング) | Rogers (1942) が非指示的カウンセリングを創案 日本カウンセリング学会が 1967 年 (昭和 42 年) にできる |
| | 精神分析療法 | 19 世紀の後半に Freud が始める 日本精神分析学会が 1955 年 (昭和 30 年) にできる |
| イメージ | 分析心理学的心理療法 | Jung が 20 世紀前半に始める 河合隼雄が、1965 年 (昭和 40 年) に箱庭療法を紹介する |